

目次

- ・ 1997年度 第1回例会報告
米国ニューベリー図書館の印刷史コレクション (若松昭子)
唯物論者の見た東京の図書館 (石井 敦)
- ・ 1997年度日本図書館文化史研究会第14回研究集会・総会 (案内)
- ・ 「図書館振興のための共同アピール」などについて
- ・ 『図書館文化史研究』第14号 (1997) 目次

1997年度 第1回例会報告 (1997年6月21日 国立国会図書館)

米国ニューベリー図書館の印刷史コレクション

—ピアス・バトラーによるインクナブラ・コレクション形成を中心に—

若松 昭子

(慶応義塾大学大学院)

はじめに

ピアス・バトラーは、1928年から24年間にわたり、シカゴ大学図書館学部において、印刷史、文化史等を教え、一方では、図書館学の理論的構築にも力を注いだ。シカゴ大学におけるバトラーの業績については、既にいくつかの評価がなされている。他方、バトラーのシカゴ大学以前の業績については、ほとんど注目されて来なかった。しかし、シカゴ大学以前のバトラーを知ることは、その後展開された彼の理論をより深く理解する上で、意義あることと考える。そこで、シカゴ大学以前のバトラーの主要な業績である、ニューベリー図書館のウイング財団印刷史コレクション形成に焦点をあて、その形成プロセスの考察を行った。

1. ニューベリー図書館への道程

バトラーの前半生の考察から、彼の人生の大きな二つの転機が指摘できる。

① 1895年バトラーが11才の時、聴覚を失ったこと。これが彼の職業選択に大きな影響を及ぼした。宗教家を目指したバトラーは、神学校へ進み牧師となるが、数年で辞職する。補聴器の普及していなかった当時、不自由な耳で牧師活動をするには限界があったからである。しかし、この時期に修得した神学や語学の知識は、印刷史コレクションを形成するうえで有力な助けとなった。

② ニューベリー図書館への就職は、その後のバトラーをライブラリアンとして規定する出発点となった。彼は図書館の仕事の中でも、特に書誌作成に興味をもった。1920年バトラーは、ニューベリー図書館内に設立されたウイング財団の責任者となり、ウイング財団印刷史コレクションの基礎づくりに尽力することとなった。

2. ニューベリー図書館とウイング財団設立

ニューベリー図書館は、多くの主題コレクションを持つ人文学分野の調査参考図書館である。ニューベリー図書館の歴史を概観すると、創設期の早い時期に三つの発展段階が認められた。それらは、①研究図書館として出発の段階、②専門分野を人文学に確立する段階、③主題コレクション形成を推進する段階である。また、主題コレクションの基盤の多くは、この創設期に築き上げられていることが分かった。

ウイング財団は、ニューベリー図書館が創立後30年を経過した頃に、独立したコレクション部門の一つとして館内に設立された。財団が設立され、バトラーが管理者としてコレクション形成に尽力した時期は、ニューベリー図書館の充実発展の段階にあり、主題コレクションを形成するには望ましい環境であった。ウイング財団コレクションは、ニューベリー図書館の主要なコレクションの一つとなるよう期待され、管理面、経理面でも有利な出発を果たした。

3. コレクション形成と成功の要因

1919年、ニューベリー図書館の理事会は、ウイング財団の目的を印刷史コレクション形成と定めた。同時に、ニューベリー図書館が所蔵している印刷史に関する資料調査を計画した。その仕事は当時図書収集部長であったバトラーに委ねられた。この調査を通して、バトラーは財団が収集すべき図書の概観を把握した。

次いで、正式に財団管理者となったバトラーは、コレクション形成の基本方針を策定する。まず、ニューベリー図書館が置かれている二つの立場、即ち人文学分野の図書館と、研究専門図書館としての立場を考慮し、財団の目的を明確化していった。その結果、ウイング財団の目的は、印刷史のなかでも特に文化史的側面に焦点を当て、学術性の高いコレクションを作ることと確認された。

バトラーはこれらの基本方針を満たすものとして、インクナブラに注目した。彼は、コレクションの目的に適した資料を選択するために、歴史的、研究的、芸術的価値の三基準を設定した。これらの基準から、バトラーは、印刷史の出発点となる初期のインクナブラ、書物の体裁（活字体、ページ構成、装飾、挿絵など）の発展過程を示すインクナブラ、後の美術図書に影響を与えた芸術性の高いインクナブラ、を収集目標に置いた。

バトラーは、積極的な購入活動を通して、書店や書籍商との関わりを密にした。彼等の助言は、コレクション形成に大きな助けとなったばかりでなく、バトラー自身が図書に関する知識を深めるうえでも有効であった。ウイング財団が現在所蔵する全インクナブラのうち、ほとんどのものは、バトラーの在任期間のうちに購入されている。バトラーの収集活動で見べきもう一つの点は、インクナブラ市場の分析である。1920年代のヨーロッパ経済は第一次大戦後の混乱期にあり、インクナブラ市場も変動が激しい時期であった。しかし、バトラーは市場の状況を冷静に分析し、計画的購入を進めることによって、上質で安価なインクナブラの収集を果たしている。

おわりに

バトラーのニューベリー図書館におけるウイング財団印刷史コレクションの形成プロセスを辿った結果、彼が印刷史の中でも特にインクナブラに焦点を絞り、短期間のうちに、歴史的、研究的、芸術的価値の高いインクナブラ・コレクションを形

成したことが明らかとなった。その背景には、バトラーの、①適切な資料収集に向けての書誌調査、②財団目的に即した収集方針策定と選書基準の確立、③積極的ではあるが冷静な収集活動の実践があったことが判明した。バトラーによるインクナブラ・コレクション形成の成功には、有利な時代状況や、数に制約がある資料群を収集対象としていた特殊条件も指摘されるであろう。しかし、バトラーの計画的なコレクションの形成過程は、今日の目から見ても、厳密で合理的なコレクション形成の可能性を示唆するものである。

唯物論者の見た東京の図書館 —併せて戸坂潤の図書館論を評す—

石井 敦
(元東洋大学)

今回のレポートは1932年発足した唯物論研究会の機関紙『唯物論研究』に発表された頼阿佐夫「東京図書館めぐり」(34、35号、1935年8月、9月)と同「社会教育の悲劇」(48号、1936年10月)の2論文が中心である。

ただ、この雑誌が活動した時期は、いうまでもなく、出版法(1897年)、治安警察法(1900年)、治安維持法(1925年)などにより、図書館は図書を取蔵する前に、内務省が発売禁止の処置をとっていたので、今日の図書館とは質的にも(蔵書内容などで)大きな懸隔があった。いってみれば官許の図書しか閲覧できなかったのである。

もちろん、この統制は一貫して進められたものではなく、時期によって変化し、その締めつけには強弱の差があった。1900年代は、まだつぎのような記事もみられてはいた。

成田の図書館

「迷信の巢窟なる成田の図書館目録を見るに、此の図書館にも、大分社会主義の本が備付けられてある。曰く『現時の社会主義』曰く『社会党』曰く『富の圧制』曰く『カール・マルクス』曰く『我社会主義』曰く『廿世紀の怪物帝国主義』……余は之を見て春の野に摘草に出て馬糞の傍らに大きな土筆が出て居るのを見た時の様な感がした。(白熊生)」(『直言』1905年3月5日)

しかし、次第に思想統制は強化され、1930年代には、羽仁五郎『歴史学批判叙説』、滝川幸辰『刑法読本』、勝田貞次『景気回復の実証的研究』、長谷川知是閑『日本ファシズム批判』などまで発禁処分となり、さらに以前は許可されていた自由主義的な立場に立つ図書も閲覧禁止となって利用者の前から消えていった。

こういう時代状況にあって、唯物論研究会の人々は、図書館をどうみていたか。前記論文はこう述べる。

「文明諸国の政府が図書館事業に力癩を入れている。目的は、読書は文化のパロメータというような態面上の問題ばかりでなしに、社会教育の重要な機関と見なしているからである。社会教育はいわゆる民衆の思想的・情操的、もっと弘く云って文化的統制である。ブルジョア社会の指導者が、民衆の思想的逸脱を防ぐために、学校制度に於けるドグマ教育の徹底化と伴って、好んで採用する知識の社会統制である。」

ととらえる。また、同誌編集後記では「研究所めぐりを今回は図書館めぐりにし

た。近代社会の産物なる大衆研究所としての図書館は如何に利用さるべきか。図書館に関する知識の必要なことは、新聞に関する正確なる見解なしに新聞を読むことが如何に愚かなるかを思えば明らかであろう。」と述べている。

ついで「東京図書館めぐり(2) - 図書館案内の巻」は帝国図書館、日比谷、駿河台、京橋、深川、大橋、藤山工業の各図書館と、慶応、東大及び唯物論研究会図書室をとりあげている(内容省略)。

「社会教育の悲劇」は前述論文で“図書館は社会教育の機関”とする。その元凶の解剖である。ここでは日本に“社会教育”が生まれた意図から、各種の社会教育活動のみ、また外国の成人教育などに触れつつ、結局は、「日本の社会教育は国民思想の画一化を目的とするばかりでなく、国民の教育程度の向上という仕事まで引受けなければならない。これは社会教育にとって悲劇である。何故なら、国民の教育程度の向上が本当に実現すれば、国民思想の画一化は不可能となり、これまでの社会教育は自殺して新しい社会教育が生れるからである。」と結んでいる。ただこの社会教育論は、同じ唯研のメンバー清水幾太郎の「日本における社会教育の特質」(『教育』1937年9月)に比べると数段劣るように思われる。なお筆者、頼阿佐夫は平井昌夫である。

もう紙数オーバーなので、最後に、戸坂潤の図書館論だけを紹介しておこう。

「書物六題」(『戸坂潤全集』第5巻、勁草書房、1967年)より。

「……日本程図書館などが、変な、あるいは、滑稽な形をとっている大資本国はまたとないのである。

適宜の資金さえあれば楽に買える筈の日本における毎日の出版物は、一体どこの図書館へ行ったら、間違いなく保存されているだろうか。遙々上野の図書館へでも行かない限り安心して読みに行くことは、この忙しい世の中で一つの冒険のようなものだ。一流の図書館へ行って見て、私の持っている平凡なあり触れた日本語の本の内、一体幾冊を見出すことが出来るだろうか。日本人が一流の図書館で、日本の平凡な出版物を読むのに、運を天にまかせて行きあたりバッタリにこれあれの本に眼を通すということは、全く文化上の悲喜劇に数えられねばなるまい。

たとい本はあっても入場することが容易でなく、入って見ると研究書を借りるためではなくて受験勉強のための椅子を占めるために、押しかけている生徒で満員なのである。これは何といても国際的にも恥しい現象の一つだ。」

「……日本のいわゆる図書館と名のつくものの全部が全部、素人的な子供用の玩具のような図書館だといっても過言ではない。……何か時事的な評論一つ書こうとしても、図書館は一向たのみにならないのである。」

1997年度日本図書館文化史研究会 第14回研究集会・総会開催要領

日時 : 1997年9月14日(日) 13:00
~15日(月・祝日) 15:00

会場 : 立教大学 7号館 7101号室
(〒171 豊島区西池袋 3-34-1)
JR池袋駅西口から徒歩10分

参加費 : 1,000円(資料費等、当日)

プログラム(予定)

第1日(9/14) テーマ「私にとって図書館文化史とは」

13:00 受付
13:20~13:30 実行委員会「開会の挨拶」
13:30~14:00 問題提起 山口源治郎(「研究会」運営委員)
14:00~14:30 発表1 河井弘志(ドイツ図書館学研究者の立場から)
14:30~15:00 発表2 池田政弘(公共図書館員の立場から)
15:00~15:15 休憩
15:15~15:45 発表3 岩猿敏生(図書館学研究者の立場から)
15:45~16:45 論議
16:45~17:00 総括 岩猿敏生
17:45~19:30 懇親会

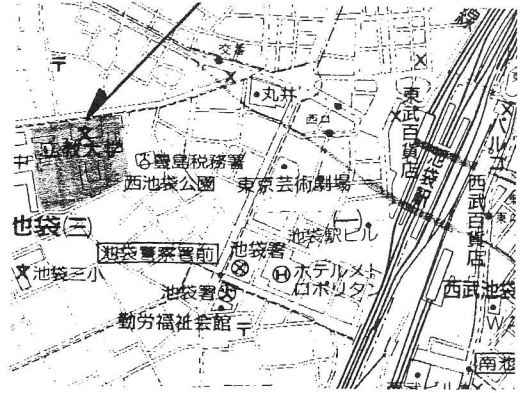
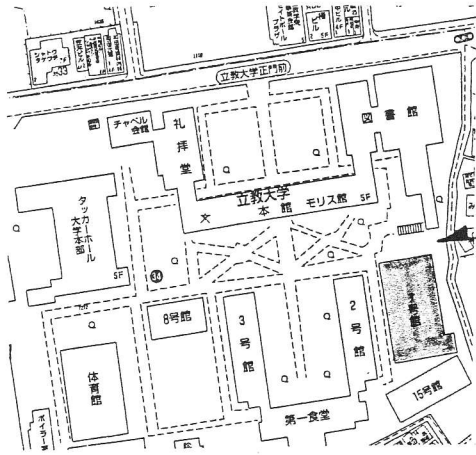
第2日(9/15) 自由発表

9:30~10:10 発表1 松野高德: 大学図書館の近代化とは何だったのか
10:10~10:50 発表2 伊香左和子: 「ハックルベリー・フィンの冒険」とア
メリカの図書館界
10:50~11:30 発表3 小田光宏: 図書館史教育の方法に関する考察
- 図書館史概説書の比較を中心に -
11:30~12:10 発表4 石井 敦: 屈指の理論家・渋谷国忠
- その思想と実践 -
12:10~13:20 昼食
13:20~14:00 チャットコーナー
14:00~15:00 日本図書館文化史研究会総会(①1997年度活動計画・予算案、
②1996年度活動報告・会計報告、③その他)
15:00 閉会(予定)

2日目の発表は、原則として30分、質疑応答には10分を予定しています。

◇研究集会・総会へのご参加は、当日も受け付けます。第1日終了後の懇親会に参加(会費は6,000円程度)を希望される方は、お早めに事務局までお申し込みください。第2日目の昼食は各自持参されるか、池袋駅周辺でおとりください。宿泊は幹旋できませんので、各自で手配してください。

詳細は、前号のニューズレターをご覧ください。



7号館側にも門があります。

研究集会・総会事務局
中林隆明

「図書館振興のための共同アピール」などについて

「図書館振興のための共同アピール“図書館長の司書有資格要件と図書館建設などの財源の確保を求めます”」（『図書館雑誌』97年5月号所載）について、6月中旬日本図書館協会から当研究会に対し、団体として賛同の要請がありました。時間的な制約（6月15日締切）もあり、各運営委員と電話で協議の結果、同封の要請はがきを小川代表名で「その趣旨に賛同する」旨発送し、9月15日開催予定の総会にて報告し了承を求めることにしました。ご理解をいただければ幸いです。

なお、上記とともに送付を受けたアピール「公立図書館のいっそうの振興にむけてご協力ください」を、文部大臣、地方分権推進委員長宛に要請するはがきの発送の呼び掛けについては、上記『図書館雑誌』に広報されていることでもあり、協議の結果当研究会では特段の行動はとらないことにしました。

アピールの経過については、『図書館雑誌』8月号（p.619-623）をご覧ください。
(中林)

『図書館文化史研究』第14号(1997) 目次

巻頭言

図書館史研究の意義 / 河井 弘志

論文

上海日本近代科学図書館史の一研究 / 米井 勝一郎

黒人の隔離をめぐる討論の始まり—1936年アメリカ図書館協会年次大会
(リッチモンド)— / 川崎 良孝

アメリカ公共図書館におけるコミュニティ論—シンポジウム「コミュニティと
図書館」(1943年)を中心に— / 吉田 右子

研究ノート

集書院の成立と衰退に関する史的考察 / 馬場 俊明

編集委員会より

上記のとおり、『図書館文化史研究』第14号(1997)が、8月下旬に発行されました。もうすぐ会員の皆さんのお手元にも届けられると思います。ご意見などをお聞かせください。
(小黒)

原稿募集

- ◇ 『図書館文化史研究』15号(1998年9月刊行予定)の原稿を募集します。原稿の締切は98年3月末日です。投稿を予定される方は、下記までご一報下さい。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。

問い合わせ、並びに原稿の送付先

小黒 浩司

- ◇ 「ニューズレター」の原稿も募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。(できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を)事務局あてお送りください。

~~~~~ 研究例会のお知らせ（関東地区） ~~~~~

◇次回以降の予定

1997年度 第2回 12月  
          第3回 3月 いずれも日時・場所は未定

\* 例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度です。中間報告的なもの、情報交流（提供）などでも結構です。お申し込みは事務局まで。

~~~~~

新入会員

~~~~~

事務局からのお知らせ

- ◇先日、京都府立図書館の保存について、「京都近代建築を考える会」（代表・蓮仏亨）から本研究会事務局あて、資料と学習会の案内が送られてきました。
- ◇山本順一運営委員は、9月に渡米、約1年間研究の予定。
- ◇本号に掲載する予定の97年3月例会における稲村徹元氏の報告（要旨）は、都合により掲載できませんでした。ご了承ください。
- ◇振込用紙を同封しますので、今年度の会費（年額 3,000円）の納入をお願いいたします。住所変更、異動等がありましたら、通信欄にご記入ください。

日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明